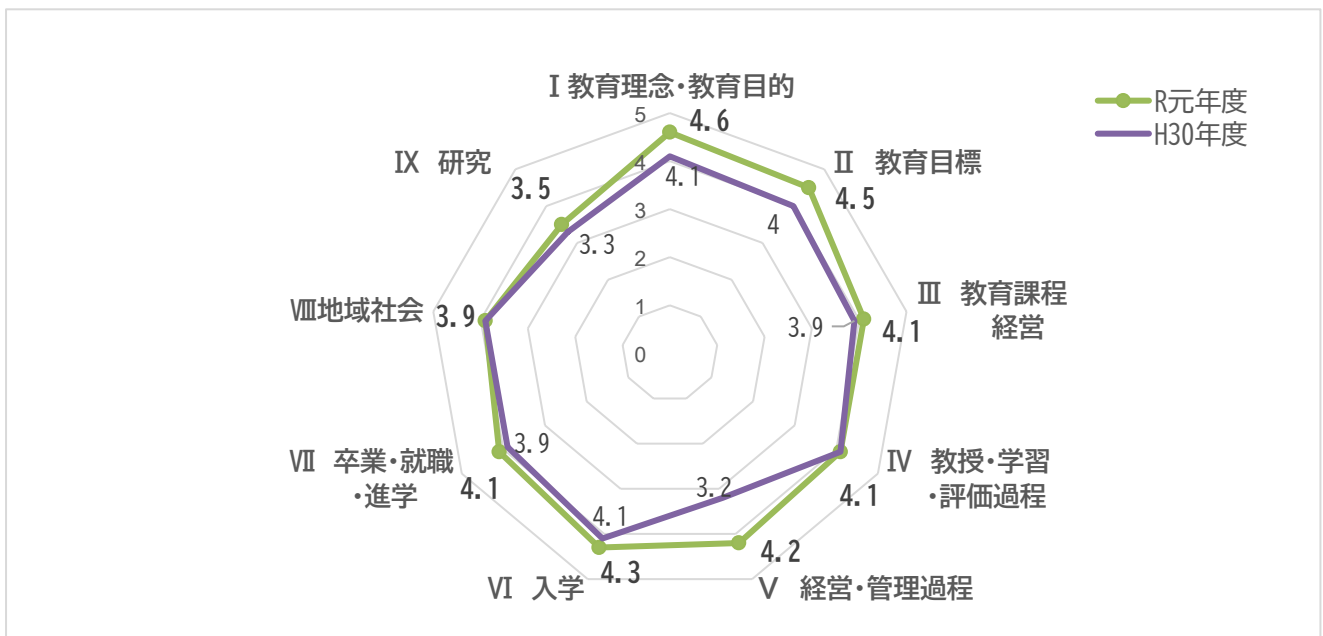


令和元年度土浦看護専門学校の学校評価

土浦看護専門学校の教育理念・教育目的は、「徳育」を基盤とし、地域に根差して活躍できる心豊かな質の高い看護師育成を目指しています。この教育理念に基づく教育水準の維持・向上を図るため、平成 26 年度に第 1 回卒業生を出したことを機に、学校運営評価を実施しています。

評価は「看護師等養成所の教育活動等に関する自己評価指針」を基に、9 領域 109 項目で構成され、5「非常に当てはまる」、4「当てはまる」、3「どちらともいえない」、2「当てはまらない」、1「非常に当てはまらない」の 5 段階で評価しました。

令和元年度の学校評価は以下の通りでした。



昨年度と比べると、令和元年度の学校評価は全領域において点数の向上がみられ、「Ⅷ地域社会」「Ⅸ研究」以外の 7 領域については、4.0 以上の結果となりました。

特に、「Ⅴ経営・管理過程」の評価は著しく向上していました。これは、今年度から運営会議で経理事務からの月次報告を導入し、教員各自が月毎に収支を確認できるようにし、自校の経営・管理の観点での意見交換を行った効果と考えます。

「Ⅸ研究」では、各教員が教授活動の傍らでも自己の研究に取り組めるよう、研究題材の提案・提示を行いましたが、研究開始までは至りませんでした。教員たちは学外の研修や学会へ主体的に参加しており、向上心は高い状態であるため、今後も研究活動ができるよう支援を続けていきたいと考えています。

また、今年度も文部科学省委託事業「専修学校リカレント教育総合推進プロジェクト」の採択を受け、「学び直し講座による潜在看護師の復職支援モデル事業」の第 2 期を終了しました。さらに附帯事業として、介護職員初任者研修を 5 月と 10 月に開催しました。これらの活動成果の効果が実感できるようになると、「Ⅷ地域社会」の評価も向上すると期待します。

令和元年度土浦看護専門学校の学校関係者評価結果

評価項目		評価の概要
I	教育理念 教育目的	徳育・地域貢献という理念・校訓が明確であり、教員・学生に浸透しているのが分かる。学生が卒業時に期待する学生像の達成へのイメージをつけやすく、卒業生にも教育理念の「徳育」が根付いている
II	教育目標	教育目標は、教育理念・教育目的との一貫性があり、学生の行動分析や評価を会議等で話し合いが行われており、教職員も具体的な理解を深められているため、共通した教育・指導となっていると評価できる。教員が授業準備のための時間を十分に確保するための対策が急務だと感じる
III	教育課程経営	学年ごとに段階に応じた教育課程であり、教材も多くあるため良い学習環境である。また、教育外活動での竹刀振りや芸術鑑賞会等で社会に出るまでの礼儀や感性の育成など徳育につながる教育になっている。実習体制は教員が各実習施設・病棟に常駐しているので、連携ができています。学生にとってもすぐ相談できる環境である
IV	教授・学習 評価・過程	教職員が効果的な指導を行うために、打ち合わせや教職員会議等で話し合いをし、共通理解のもと同じ視点で指導できていると評価できる。また、心の相談室ができたことにより、学生・教員の精神面での支援もなされていると評価できる。学生の将来を見据えた相談や指導は、引き続き力を入れて取り組んでほしい
V	経営・管理過程	設立した理事長の生の声を聴き、教職員全体でいい学校にしたい思いが共有できていると評価できる
VI	入学	受験生募集の方針や内容・方法について組織的・計画的に取り組んでいると評価できる。入学までにオープンキャンパスや入学前教育が数回あり、より詳しく学校を理解して入学してこれる。また、受験生にアドミッションポリシーを提示し理念に沿った学生になれるか受験生の思いを確認できる点もよいと評価できる
VII	卒業・就職・進学	卒業後も卒業生のために時間をつくって、連絡相談がしやすい雰囲気でも温かく迎えてくれる教職員に支えられている。また、卒業後も心配な技術や新人指導の教材が活用可能であるため、今後活用していきたいと考えている。卒業生の就職先の評価は、実施して結果が出たら、学校をPRする資料として活用できるとよい
VIII	地域社会	構内環境や霞ヶ浦を見ながら勉強し、文化や自然、地域に触れ合えることで心のおおらかさや教養、学業の合間の気分転換などに繋がると評価できる。霞ヶ浦マラソンのボランティアや家族会の参加等今後も続いてほしいと考える。地域社会における資源の活用の(4)の自己評価が昨年より下がった理由を考えていく必要がある。介護職員初任者研修などは、地域の人材育成に貢献し得るものだと感じる
IX	研究	教職員が様々な研修・鑑賞会等に参加し、新しい知識を身につけそれを教育に反映させることで、学生もより最新の知識獲得につながっていると評価できる。教員が自らの専門性を高める研究に取り組むには、業務負担をどう軽減するかが重要である

